「からし種」を蒔く教育

佐々木　公明
（尚絅学院大学　学長）

一　「衣錦尚絅」

一八九二年女性宣教師によって開始された家塾「尚絅女学会」に源を持つ尚絅学院大学は、現在では総合人間科学部を主体とする四年制大学に発展し、共生社会に貢献する視点から、男女共学の学び舎になっています。学校名は中国古典『中庸』の「衣錦尚絅」（錦の衣を着てても、その上から絅（薄もの）をかける）から取られました。学院としては一一七年の歴史があり、日本の民主主義主唱のリーダーであった吉野作造も当学院バイブルクラスで学び、その精神的基盤を創りました。

大学教育の重要な任務は、学生が社会に出て、それぞれの仕事をするように育てることです。人間にとって仕事が重要なのは、それが経済的自立のための所得を獲得するだけではなく、仕事によって社会的に貢献することによって喜びと、自分を誇りに思うことができるからです。また仕事を通して他者と交わりを持つことができることも重要です。失業が、人間の幸福度を大幅に低下させることが最近の「幸福学」の研究でも明らか

にされています。また日本でも広く読まれている、ラッセル、ヒルティ、アランによる三つの『幸福論』でも仕事が人間を幸福にすると説いています。例えば、アランは「仕事は唯一のよろこび、それだけで満たされるよろこびである」と、ヒルティは「仕事なしにこの世の幸福はありえない」とそれぞれ断言しています。

さて、大学は、仕事をする人間として、どのような人材を育成すべきかを就労現場の方々や識者にお聞きすると、ほとんどの答えは、専門的知識・技術の習得よりは人間力を備えることが重要だということです。すなわち、困難に遭遇するときそれを乗り越えることができる人材、他者との良い関係を築ける人材です。人材育成について、当尚絅学院の建学の精神「衣錦尚絅」は単に謙遜・謙虚な振舞いに留まらず、積極的に「内面を磨く」ことを教えています。『中庸』には「衣錦尚絅」に引き続き、「闇然而日章」とありますが、「その行いは人目を引かないが、日に日にその真価が表れてくる」人材を育成することが私どもの大学の教育理念です。

二　尚絅学院大学の特色

尚絅学院大学の「総合人間科学部」は、総合的なプロデュース能力を身に付けた人材の育成を目標とする「表現文化学科」、現実に生きている人間を総合的に理解し、心と行動の問題の解決策を提示できる人材の育成を目標とする「人間心理学科」、共生社会の実現と国際協力・支援に貢献できる人材の育成を目指す「現代社会学科」、人間生活と環境の共生の具体化を図る人材の育成を目標とする「生活環境学科」、人間性豊かな管理栄養士の養成を目標とする「健康栄養学科」から成ります。五五年の歴史をもち、これまで地域社会からも高い評価を得てきている「女子短大保育科」も、二〇一〇年度から今日の社会的要請に応えられる、より高度な専門性を備えた保育者・教育者の養成を目標とする、男女共学の四年制の「子ども学科」に改組する計画です（現在設置認可申請中）。人間を心と身体の総合という視点から捉え、人間の健康な生活の営みに関わる諸問題を科学的に研究し、実践に生かすことを目的にして、二〇〇七年度から、心理学専攻と健康栄養科学専攻から成る、大学院「総合人間科学研究科」も開設されました。

良い仕事ができるような「人間的総合力」を身に付けるために、まず、哲学、倫理、宗教、歴史、文化、社会に関するLiberal artsを十分に学ばせる工夫をしています。また、本来のLiberal arts七科目に含まれる、人間を豊かにし、人間の間の和に訴える「音楽」の教育も重視しています。本学の学生数二〇〇〇名程度の小規模性を生かした、「少人数を対象とする教員による手作り教育」と大学が立地する圏域を中心とする「地域社会との協働による実践的教育」を柱とした専門教育を推進しています。これらは、教員と学生との間の関係が密であることと相俟って、本学の教育の特色となっています。

三　所謂「競争」について

「競争」とか「競争的」という言葉が現代社会を席巻し、それは必ずしも経済の「市場」だけでなく、教育、医療、福祉と言った市場機構から最も遠いと考えられてきた領域においても言及され、大学の教育・研究もそれに巻き込まれています。競争では必ず敗者が存在します。競争に敗れた社会、組織、国民、そして個々の人間はそのペナルティを甘受せよということです。「競争」の利益は確かにあります。それは与えられた事業を行う上で、最も〝効率的〟に資源を配分するように働くメカニズムです。しかし、このメカニズムが働くための条件は極めて限定的であることを忘れてはなりません。資金やマンパワーなどの規模の違いを無視した〝不公平な〟競争では望ましい結果は生まれません。さらに、競争のメカニズムは勝者と敗者の間の「分配」格差については一切関知しません。まさに勝者のための論理なのです。個人間の競争は協力や連携の動機を殺ぎます。競争が組織間で行われる限りにおいて、個々の組織内で個人間の協力、連携がなされるかも知れません。しかし、組織間（例えば、国間、企業間、学校間）の競争は各組織内の個人間の競争をも必然化させることになります。競争は個人を孤立化させますが、現代社会においては、個人間の競争よりも協力、助け合いが必要な場合がはるかに多いと言えます。また、競争は必ず「比較」を伴います。最近の「幸福学」の研究においても他者との過剰な比較が、人間の評価の本質を歪め、個人の幸福度を低下させることが心理学実験で明らかにされているのです。例え〝絶対的水準〟が共に向上したとしても、他人との間の〝相対的水準〟が高まらない

限り人は幸福とは感じないのです。まさに「競争」は人間を不幸にする危険があります。フィンランドの教育分野の目標は「平等」と「公平」であり、「競争する学び」ではなく「共同する学び」が基本的精神と聞き及びます。その結果、広く知られているように「子供の学習到達度」のみならず、「国別経済競争力」でも世界第一位と評価されています。これはアイロニカルな結果ですが、「人間の総合力」がどのような社会・生活環境で涵養されるのかを如実に語っているように思えます。

大学間も志願者や外部資金を巡り、「競争」に晒されていますが、各大学の歴史、理念、学部・学科構成、規模、立地地域等が異なるのですから、皮相な一律の競争ではなく、各大学の人材養成の目標と理念、それ故教育の特色を十分に広報し、〝進学者による投票〟が有効に働く仕組みを考えるべきです。国も補助金を配分する際に、（最近はその様な傾向に向かっているようではありますが）多様な評価軸に沿ってなすべきと考えます。さらに、国は本誌発行元である「日本学生支援機構」から給付される奨学金制度をより充実させるべきです。二〇〇九年七月三一日の朝日新聞の一面トップ記事は「親の年収進学率左右」というもので、特に私立大学への進学率は親の所得差によって影響され、顕著な「教育格差」が現出しています。私も自分の大学の学生が書いた授業料延納願を読み、親の年収がさほど高くない学生が直面している経済的困難を目の当たりにしています。

しかし、現実社会から「競争」は無くならないでしょう。競争によって協力、協働、共生の精神が損なわれ、低下しないように、学生が絶えず自分を見つめるような教育に心を配ることが肝要だと考えています。

四　大学は畑

「からし種」は「どんな種よりも小さいのに、成長するとどの野菜よりも大きくなり、空の鳥が来て枝に巣を作るほどの木になる」（『新約聖書』マタイによる福音書一三：三二）と教えています。尚絅学院大学の教育目標は「からし種」に似ています。だから、私たちは地道に、しかし着実に大学の畑を耕し、そこに「からし種」を蒔きます。